月刊

JMITU

ディスカ

新型コロナ対応版

4月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ　グループ分会　2021年発行

No,436

2021年春闘
夏季一時金回答　妥結の方向へ
セガでは全従業員に特別慰労金支給

セガ、ＳＬＳに春闘・夏季一時金要求回答がありました。

賃上げ回答

セガ
平均昇給額　４９２８円
ＳＬＳ
平均昇給額　３８９９円

夏季一時金

セガ　係数　２．５
平均支給額　８５万円ぐらい
ＳＬＳ　係数１．７５
平均支給額　６３万６９５円
６月１８日支給予定

セガ賞与については「結果が出たらきちっと賞与支給する。巣ごもりと海外の過去タイトルのおかげだが、理由が何であれ賞与として還元する。また赤字になれば下がるかもしれない。」

ＳＬＳ賞与は「昨年の春先からコロナの影響でゲームセンター休業、停止と厳しい状態の中、冬の一時金については社員の生活の事を危惧して、当社として最大限支給した。前期決算しまってきているが営業利益は創業から２６年間始めての赤字と、今期も世の中の情勢は非常に厳しく今回の一時金も社員の生活を配慮した。最終回答です。」

今回の回答を受けて、私たち労働組合は、コロナ渦での回答、セガでは昨年より係数０．５アップと一律の慰労金、ＳＬＳにおいては会社の状況も勘案し今回は妥結の方向に向かいます。

セガでは特別慰労金支給

今年一年間かなり在宅勤務を強いられる中で開発機材を自宅に持ち込むなど、皆さん大変だったという事もあり、特別慰労金を支給する。正社員には一律２０万円、契約社員には１０万円、アルバイトの方は一律５万円と雇用形態で分けているが支給する。

セガサミーＨＤの子育て支援施策実施について

組合「セガサミーＨＤで子供出産時に１００万円、小学生入学時に３０万円などの制度があるがセガサミーＨＤだけなのか」会社「セガサミーＨＤには、家族手当の支給がなく、今回ＨＤへの転籍者に対しての代替案です。」

株式譲渡したＡＭ施設では

私達労働組合に、店舗の従業員から匿名投稿がありました。「店長が理不尽な理由でスタッフを責め、高圧的な態度を取り、スタッフは、店長の態度の為に仕事が苦痛、怖くて仕事が手につかない。辞めたい。店長自身もマネージャーやその上から指摘を受けた際にはスタッフに当たり散らしていきます。」

コロナ渦の中、施設運営はかなり厳しい状態に追い込まれ、その締めつけがパワハラという形で末端にまで影響が出ています。理由はどうであれパワハラは許されることではありません。

4こま漫画

川﨑よしき

自動運転の時代になると
運転手はいらなくなるねぇ
・・・

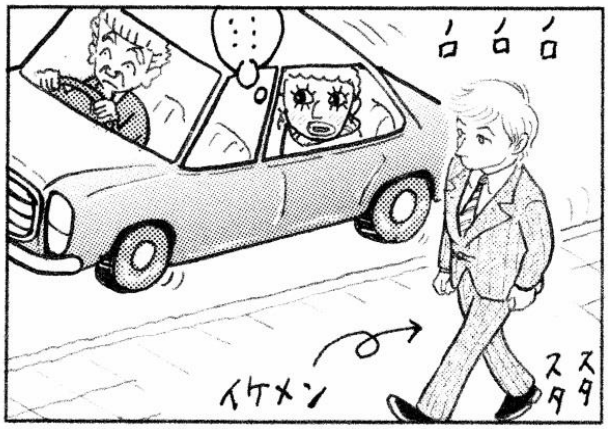
確定申告窓口
医療費の支払いが多かったので控除をお願いいたします

経費削減が出来ていい時代が来るわ
でも社長

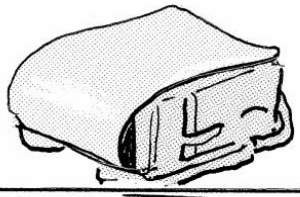
これがヘルニアの治療費
・・・

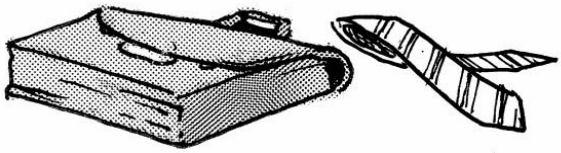
自動運転になると社長の気持ちを察した運転はしませんよ

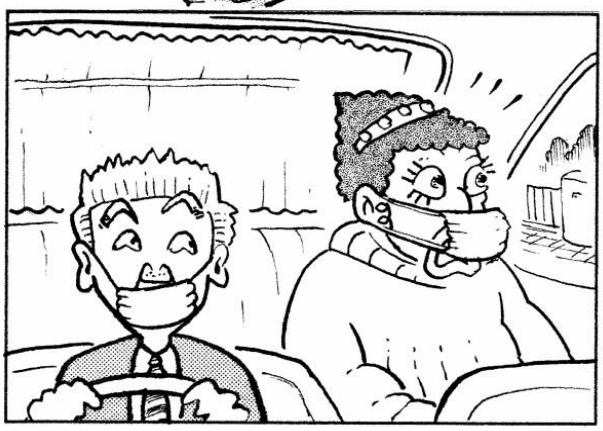
こちらが白内障の手術の領収書
それから
マッテ・・・
マッテ・・


・・・
イケメン
スタスタ

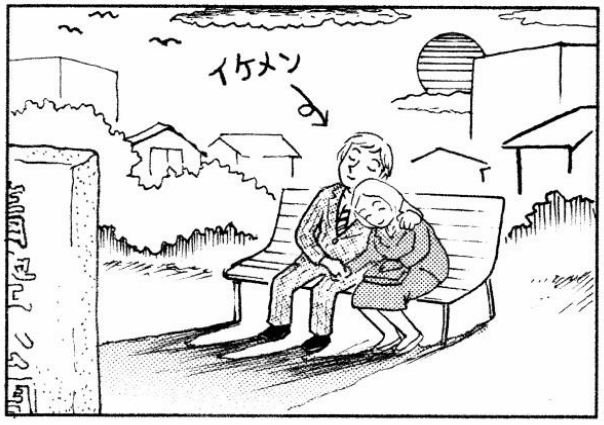
ドレもコレも動物病院の領収書ですが
これはあなたの治療？
ゆらん



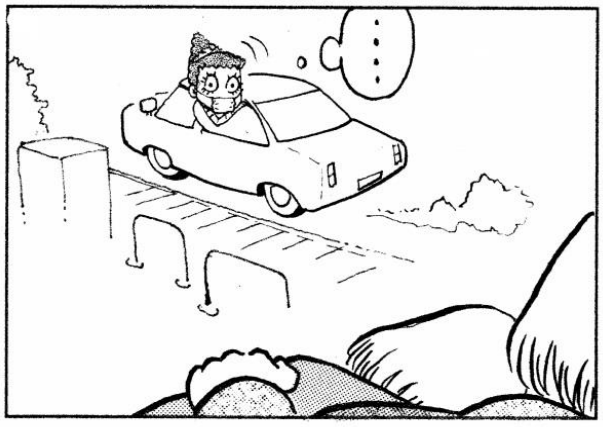


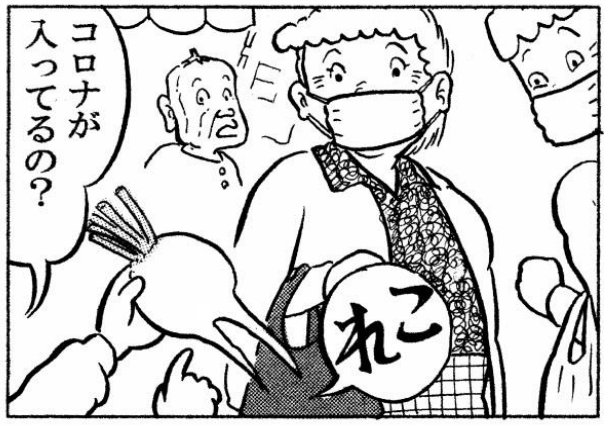


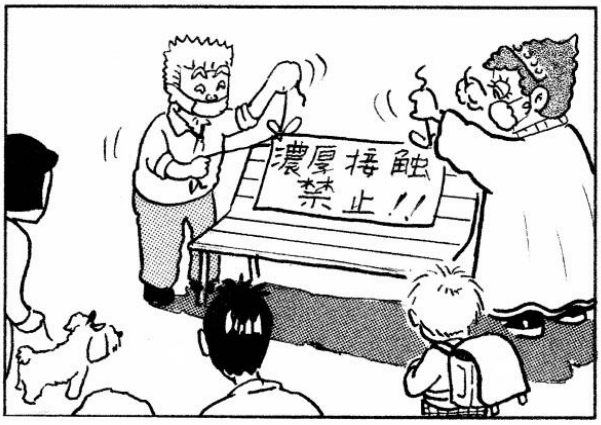
いろんな変異かぶが増えてるそうよ
ヤダヤダ
コロナは怖いわね


イケメン

バァバ
へんいかぶがあるよ
かぶ 30円


……


コロナが入ってるの？
れこ


濃厚接触禁止!!

ちがうのね・・・・
百

掌編小説

むかし、むかし

仙洞田一彦

三度、緊急事態宣言という。「東京に来ないでください」などと言うが、通勤を止めたら食っていけない。コロナ禍で職を失った人はすでに多く、さらに増える条件が作られる。

食えないということで昔を思い出した。ちょうど五十年前、一九七一年春のこと。

昼頃、アパートから国鉄蒲田駅に向かう途中にある公園のベンチに腰を下ろしていた。薄日が差していた。東京では美濃部知事が再選し、大阪では黒田知事が誕生し、何とはなしに変わるということにうきうきしたような雰囲気があったのは、春の陽気のせいばかりではないかも知れない。私には、別世界とまでは言わないが、どこか遠く離れた場所の出来事のように感じられていた。

舞い降りた鳩が、ひょこひょことこちらに向かって歩いてきた。すぐ近くまで来て、こちらの気配をうかがっている。公園の真ん中は広場になっていて、滑り台やジャングルジムの遊具は、端にあった。広場を挟んだ向かい側のベンチで、お婆さんが、時折パンをちぎって投げていた。そちらには何羽もの鳩が寄っている。

こちらに一羽だけ寄って来た鳩も、私が何かエサでも放ってくれるのではないかと期待して来たのだろう。間近で右に行ったり、左に行ったりしていたが、私がなにも放らないので、気配をうかがいながらも、次第に離れて行ってしまった。

朝から何も食っていないんだ。離れて行く鳩に「悪いな」とつぶやいた。パンを買う金くらいはあるが、使わないで済ませれば、使わない方がいい。今朝腹に入れたのはインスタントコーヒーだけだった。それは自分のせいだ。一日、駅ビルの立ち食いソバ一食だけという日もあるのは自分のせいだ。ここにこうして座っているのは大岸の所に行こうか、どうしようかと迷っているからだった。三月末までに払わなければならない家賃をまだ払ってなかった。その家賃六千円と食費を少し、合計一万円を借りに行こうかと思っている。家賃は待ったなしで、借金するしかない。迷っていたのは仕事のことだった。大岸は大きく年の離れた兄貴くらいの年齢だ。

一年と少し前。普段の日は残業、休みは日曜日だけの工場を辞めた。理由は、小説を書く時間が取れないからだった。その話を文学の同人の集まりで話したところ、同人の大岸から話があった。

大岸は業界紙のような仕事をしていた。購読料でなく会費制であり、会員に毎月会報を発行している。会員は運送会社で、会員が多くなれば収入は安定する。私が大岸の会社に入るのではない。雇用関係はない。私が自立してやって行くつもりがあるなら助け

てくれるという。会報を持ってまわり、会員を募る。その会報は私が買い取らなければならないが、この間一年以上、一円も払っていなかった。それでも、毎月必要な部数をくれた。会員にする区域が限定されているわけではない。私に能力があれば、いくらでも拡大可能だった。

不精髭を剃り、床屋にも行った。名刺も作った。一着しか無い背広を着て出かけた。手始めに大岸からR市の運送会社の名簿を貰い、R駅を降りた。名簿と地図を照らし合わせて、近いところから行くことにした。大岸から、社長に直接話さなければ行けないということや、何度も行って親しくなることだと教えられた。また、経済紙誌を読んで景気の話もできるようにしなければならないと言われた。会報だから会員の社長から話を聞いたら、それを記事にして会報に載せることも教えられた。

肝心の小説を書く時間だが、その気になりさえすれば拘束されていないので自由になる。定期券を買って、毎日通うようにしなければだめだといわれたが、毎日通ったとしても書く時間は取れる。それは魅力だったし、挑戦してみる価値はあった。そう考えた。

駅から一番近い会社に行った。住所は間違いなかったが、看板がない。建物のすぐ隣に駐車場があったが、軽トラックが一台止まっていただけ。でも、まず第一歩を踏み出さなければならない。

玄関を開けた。五十歳位の、自動車修理工のような白いつなぎを着た人がいた。直前に入って来たようすで立っていた。つなぎはくたびれていて、油汚れだろうが所々黒くなっていた。

「社長さん、いらっしゃいますか」

私はその人に言った。その人は振り返ると、私を下から上まで見て言った。

「俺だ」

私は慌ててポケットから名刺を出した。社長は目を細めて、手を伸ばして遠ざけた名刺を読んだ。私はすぐに、大岸から貰って来た会報を鞄から取り出して、渡した。会報はB5版二十ページくらい。表紙は目次も兼ねている。そこには運送会社の名前がいくつか載っていた。それを見たせいか、社長の態度がいくらか和らいだようだ。

私は説明し、会員になってくれないかと頼んだ。

「うちは、俺一人、軽トラ一台でやってるんだ。そこと一緒にはできないよ」

そう言って、会報の表紙を顎でしゃくった。表紙に書いてあった会社のことを指したのだろう。私は次の言葉が出なかった。その会社がどんな規模かも知らないし、こういう場合どう答えたらよいかもわからなかった。社長はにやりと笑みを浮かべて言った。

「他をまわって来な。他が入ったら、入ってやるよ」

私はその社長の言葉にひどく救われた気持ちになったので、頭を思い切り下げて、「は

い」といい玄関を出た。
　次のところに向かいながら社長の言葉を反芻した。何となく救われたような気がしたが、お前にはできっこないというような意味にもとれた。初めからうまく行くわけがない。新入社員のつもりになってなどと気を取り直して次に向かった。しかし、社長がいても面会を断られたり、不在だったりして会えなかった。
　その後は、落ち込み、気を取り直しという日々が続いた。二十台くらいトラックを持っている会社に行った。そこの社長はやせ形で六十歳位だろうか、髪は大分薄くなっている。事務所の奥の大きめの机にいたが、ご隠居という感じだった。一回目、二回目と行くにしたがって、私が玄関を入ると、奥から手招きするようになった。実務から離れた人で肩書こそ社長には違いないが、暇なのだ。要するに私は暇つぶしの恰好な話相手だったのだ。
　社長は顎で、壁に立て掛けてあった折り畳み椅子を指す。私はその折り畳み椅子を開いて、社長の隣りやや後に置き腰掛ける。社長は話したくなさそうな、しぶしぶの顔を作って、おもむろに肘掛椅子を、私の方に回転させる。話したくてうずうずしているが、近くに仕事をしている事務員の手前もあるから、そういうふりをするのだろう。
　私としては行きやすいが、そこにばかり行っていたのでは仕事にならない。もっと付き合いが深くなれば、また別の展開があるかもしれないが、そんな余裕はない。会員を開拓しなければならない。
　あちこち訪問を重ねるうちに自分の弱点がハッキリしてきた。話を聞くことはあまり苦にはならないが、話すことが駄目だった。次から次へと言葉が出て来る人がうらやましかった。それなりに経済紙誌などに目を通していたが、臆してしまって話題に持ち出せなかった。親しい人なら年上の人でも、気軽に世間話もできるが、初対面では口を開く度胸も出てこなかった。
　自己紹介して、会報の説明をしたらそれで終わりだった。隠居社長のように、自分の方から次から次への話す人なら間が持てるが、大概は自分の仕事をしながらついでに私の話を聞いている。あるいは私の話など上の空で、他のことを考えている。
　私の沈黙が続いてしまうと、相手は「用が済んだら帰れ」といったような顔をこちらに向ける。業界の話も少しずつ詳しくはなっていったが、話が下手だという劣等感も日々強くなって行った。そう思うと余計に言葉が出てこなくなった。会員も増えなかった。自分の能力のなさを考えてしまうと、仕事に行く日が、週に五日となり、四日となった。
　朝からアパートの部屋で松本清張の本を読み始め、かなり厚い文庫本でも夕方には読み終わる日もあった。松本清張の本を一日一冊読み続けても、生活の足しにはならない。会員も増えない。そういう生

活になると、頭の片隅の、仕事に行かなければという気持ちが圧力になり、小説も書けなくなる。仕事に出ても運送会社を訪問する気にもならず、その町を流れている川の土手をぶらぶら歩いただけで帰って来てしまうこともあった。

二十代も半ばになって、仕事が自分に向いているか、いないかも考えないで転職したのかと反省も出る。初めの会社では事務員、次は旋盤工。話がへたでも出来る。

大岸はその都度、私を励ましてくれた。仕事の助言もしてくれた。

私は公園を出て大岸の家に向かった。私鉄で駅二つのところにあるが、歩けない距離ではないので歩く。自分の姿が大岸の目にどう映ったか。月に何度も行くので、私の心中などお見通しだろう。

「やあ、いらっしゃい」

大岸は笑顔で迎えてくれた。いつもそうである。居間つづきの食堂にある四人掛けの、いつもの席にわたしは座る。大岸は居間の方から立って来て私の向かいに腰掛けた。仕事が続けられそうもない話は、過去にも何度かして来た。その度に励まされながら、続けてきた。雇用関係はないので退職するということではないが、世話になりっぱなしで勝手に辞めてしまうわけにはいかない。

「仕事、続けられそうにありません」

「そう。うちの母さんも、もう無理なようだと言っていた」

「母さん」というのは大岸の妻のことだった。

いつもなら、大岸から仕事をやっているかどうかと聞かれるが、もうその必要もなくなったのだ。毎日仕事に行かなきゃだめだよと叱られることもなくなったのだ。私にとって、それはそれで寂しい気がするが、仕方ない。

「すみません」私は謝った。

「それから、お金を少し」と、続けた。

「しょうがないなあ」

大岸は、分っているという風に、笑いながら言った。

「先月の家賃払ってないので、それとで、一万円ばかり貸していただきたいのですが」

「母さん、一万円。返せる見通しないだろう」

大岸は居間にいた奥さんに向かって言った。後の方はやや真顔になって私に言った。私は肯いた。大岸は奥さんから受け取った一万円を私に差し出して言った。

「カンパだよ、返さなくていい。飯でも食って行きなさいよ」

もう一度私は頭を下げた。結局、夕飯まで居続けた。

「小説、頑張んなさいよ」

大岸が帰り際に言った。時間がなくて書けなかった。今度は時間があっても書けなかった。まわりの問題ではなく、当人の問題であることが証明されてしまったようだ。

陽がすっかり落ちた外は、北の風が吹き、冬が戻っていた。

コロナ禍にあっては、のどかすぎる昔話かもしれない。